

音楽科教育と特別支援教育に見る

学生の専門性向上の取り組み

～教員養成課程における授業実践の報告と課題～

Efforts to improve university students' expertise in music
education and special education

-Report and tasks of lesson practice in teacher training course-

西 村 健 一 梶 間 奈 保
(保育教育学科) (保育教育学科)

キーワード：特別支援学校学習指導要領 学びの連続性
特別支援教育 音楽科教育

1. はじめに

平成29年4月、特別支援学校小学部・中学部の学習指導要領が告示された（文部科学省：2018）。今回の改訂の中では、インクルーシブ教育システムの推進に伴い、障害のある子供たちの学びの場の柔軟な選択が進むことを踏まえ、幼稚園、小・中・高等学校の教育課程との連続性を重視することが示された。いわゆる「学びの連続性」である。例えば、知的障害のある児童生徒であっても、習熟度によっては小学校学習指導要領又は中学校学習指導要領における各教科の目標及び内容の一部を取り入れることができるように規定された。

これまでも、小学校等の教科と知的障害教育の教科の見方・考え方は、異なるのか、それとも同じであるのかについては議論が重ねられてきた。しかし、今回の改定では、小学校等の教科と知的障害教育の教科の見方・考え方は基本的には同じであると整理された（丹野：2018）。

一方、今回の改訂において特別支援学校小学部の音楽科の目標は「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活の中の音や音楽に興味や関心をもって関わる資質・能力」（文部科学省：2018）を様々な活動を通して育成することを目指すと述べられている。つまり、表現活動や音楽鑑賞といった多様な音楽活動の体験

が、児童の音楽的な見方・考え方につながるとし、それらが生活の中でも様々な事象、あるいは自己の感情などに関連し興味関心としてあらわれてくると考えられている。ここでの多様な音楽活動は、小学校学習指導要領における音楽科の「A 表現」（「歌唱」、「器楽」、「音楽づくり」）と「B 鑑賞」の 2 つの領域とのつながりをふまえ、図 1 に示すように従前の教科の 5 分野の内容構成から、音楽遊び、歌唱、器楽、音楽づくり、身体表現を「A 表現」領域として、「B 鑑賞」はそれ自体を 1 つの領域として区別し、内容を示す事項も新たに整理された。

これまでは「音楽遊び」や「鑑賞」など内容を段階で示されており、小学部は 3 段階の中でまず、音や音楽との出会いから始め、伴奏に合わせながら歌ったり、他者の演奏を見ながら演奏したりするなど、感覚間の統合を図ることが重要とされてきた。しかし、平成 29 年告示内容では、これらの内容を領域として構成した上で育成を目指す資質・能力それぞれに段階をおき、「共通事項」とも関連しながら指導が行われるよう求められている。

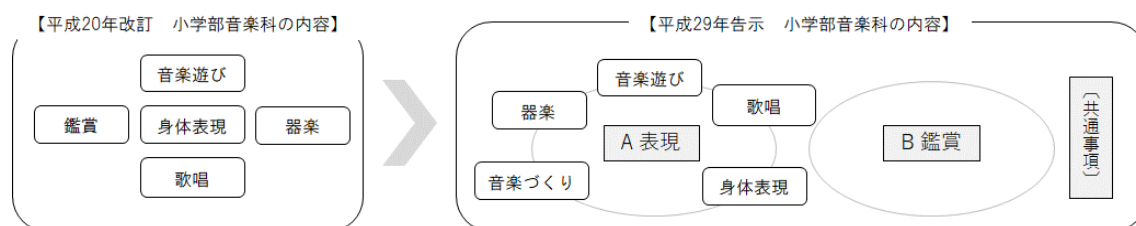


図 1. 特別支援学校小学部音楽科の内容の改訂イメージ図

このように特別支援教育においても、これまで以上に各教科のねらいや内容等を深く理解した上で、個々の障害特性に応じた教科指導を行う必要性を示している。この特別支援教育における教科指導の在り方について、児童一人ひとりの事例や授業での実践報告など効果的な側面や配慮点に関して報告はあるものの、教員側の授業実践の分析的視点に立った研究については、今後深めていくことが、告示された学習指導要領の示す教科の視点ではないだろうか。同時に、教員養成課程の大学において特別支援教育の教員免許を取得する学生においても、特別支援教育だけではなく小学校等の各教科の専門性を高める取り組みが必要となるだろう。

そこで本稿では、教員養成課程における音楽科教育と特別支援教育の視点をもつ授業実践の取り組みを報告すること、専門性向上に注目

したうえで成果と課題を整理することを目的とする。なお、本稿で取り上げる島根県立大学人間文化学部保育教育学科は、保育士・幼稚園教諭一種・小学校教諭一種・特別支援学校教諭一種の中から免許を選択して学修を目指す学生らが在籍しており、平成30年4月に開設された学校である。

2. 方法

1) 取り組み内容について

本研究は、本学の保育教育学科一年次の秋学期の科目「音楽Ⅱ」において設定した、音楽教育プログラム「おんがくとあそぼう」の学生らの音楽遊び実践の一部である。この授業に受講した学生たちは、自分たちで考えた音楽遊びを小学校や施設などの現場で行い、自身の取り組み内容や音楽と子どもの関わりについて実践の振り返りをしながら考察を行っていく。この取り組みは、教員等を志す学生自身が子どもたちと一緒に音楽の面白さや楽しさを人との関わりを通して感じることで、教員養成課程の音楽教育の基盤となることを目指している。

学生らは数名のグループに分かれ、小学校、幼稚園等の教育現場、及び施設等の計9か所にそれぞれグループごとに2回訪問することになっている。1回目の訪問では、見学を通して現場の子どもたちと交流し、子どもたちとどのような音楽あそびが実施できるか検討し、1ヶ月後に2回目の訪問で自分たちが考えた音楽あそびを実施するという流れとなっている。ここで取り上げる実践は、特別支援教育と音楽教育的視点を踏まえたグループAの内容である。グループAの実施対象団体である「ユニバーサル柔道アカデミー」には特別支援教育の対象となる児童・生徒が在籍していることが予想され、特別支援教育に関心が高い学生4名でグルーピングをした。この学生らが実践する「ユニバーサル柔道アカデミー島根」は、障害の有無にかかわらず誰もが柔道に親しめる環境「柔道のユニバーサルデザイン化」を目指しながら、様々な分野とのコラボレーションにより、親子の健やかな成長をサポートすることを目的とした団体である。柔道のみこだわらず、体幹を鍛えるトレーニングや有酸素運動など幼少期・学齢期に取り入れたいメニューを中心に行い、長縄跳びやバランスボール運動など多様な運動を積極的に取り入れている。さらに「学びタイム」といったソーシャルスキルトレーニングを活用して人とのかかわり方など社会で生きていくために必要なスキルを修得する時間も設定し

ており、柔道の指導者だけでなく保護者も一緒にトレーニングに参加するなど、明るく家庭的な雰囲気の団体である。筆者らが「ユニバーサル柔道アカデミー島根」に連絡を取り、音楽遊びの実践に関する相談をしたところ、快く受け入れていただいた。

学生の「おんがくとあそぼう」の授業実践は、前述したとおり、訪問見学の1回と実践活動の1回の計2回行った(表1)。第1回目は、訪問見学のほかに、第2筆者の音楽遊びを実施した。この音楽遊びに学生も子どもたちと一緒に参加することで、音楽活動を通して子どもの特性や様子を知るとともに、音楽的視点の展開を学ぶことを目的としている。この第1回目の訪問見学を実施した後、学生らは授業内外で、訪問先の子どもたちにとってどのような音楽遊びが実施できるのか、あるいは音楽遊びを通してどのようなことを感じてもらいたいのかなどグループ内で話し合い、教員(筆者)らとの意見交換をしながら内容を検討していった。さらに「音楽Ⅱ」の授業内では、受講生を子どもに見立てて学生らが模擬実践をするなど、実践内容を深めることができるよう配慮を行った。このような指導を踏まえ、第2回目を学生らが音楽教育や特別支援教育の観点から考えた音楽あそびの実践を行った。

2) 分析方法について

本研究では学生の実践について「実践内容」と「実践に対する学生の振り返り」の2つの視点から分析することとした。まず、実践内容については、学生の音楽遊びの実践である第2回目の活動を、1台の

表 1. 各実践の日時や内容について

	日時と場所	内 容
第 1 回	2018 年 11 月 9 日 (金)	筆者による音楽遊びの実践
	午後 7 時～8 時半	1. ウォーミングアップ 『もしもしかめよかめさんよ』で肩たたき
	場所：ユニバーサル柔道アカデミー	2. リズムあそび 1) 自己紹介 2) 好きな食べ物 3. 表現あそび スカーフを使って『風になりたい』を踊ろう (合計約 20 分)
第 2 回	2018 年 12 月 9 日 (金)	学生による「おんがくとあそぼう」実践活動
	午後 7 時～8 時半	1. リズムあそび 2. 表現あそび 『ミッキーマウスマーチ』に合わせてストップ & 表現
	場所：ユニバーサル柔道アカデミー	3. ダンス表現 『ドラえもん』に合わせてダンス (合計約 35 分)

ハンディビデオカメラを用いて撮影した。今回は学生や子どもたちの動きに合わせて撮るよう配慮し、ビデオカメラは固定せず第2筆者が持ちながら撮影を行った。この録画した学生の音楽遊びについて、活動の内容や学生の発話、子どもたちの反応などを記録に起こし、学生の実践について筆者らがそれぞれ音楽科教育と特別支援教育の観点を活動の記録に加えて考察する。なお、ビデオ撮影については授業の振り返りとして学生が活用すること及び、研究としても使用することについて説明を行い、許可を得て行った。

次に実践に対する学生の振り返りでは、古田（2016）のKJ法の臨床応用の手順に従い、学生の音楽あそびの実践レポートの全文章が表す内容を書き出し、グループ化した際のラベルをレポートの要素とした。また、レポートの全文章が表す内容を「実践に関する記述」「音楽に関する記述」「特別支援教育に関する記述」に分類し比較した。

さらに、レポートの各文章の記述内容を筆者らで「実践に関する記述」「音楽教育に関する記述」「特別支援教育に関する記述」の観点別に分類した。そして、各観定の全体に占める割合を算出し比較した。

3) 倫理面での配慮について

今回の「ユニバーサル柔道アカデミー島根」の実践に参加した学生には、本実践及び実践に関する学生らのレポートについて、研究で活用することについて事前に了承を得た。また、「ユニバーサル柔道アカデミー島根」にも論文として実践をまとめることでも了承を得た。さらに、研究を通して各個人が特定されることがないように配慮をした。

3. 実践

学生の音楽遊びの内容を簡単に述べる。音楽遊びの冒頭は、学生が挨拶をした後に第1回目の訪問見学時にも行った名前のリズム遊びであった。自分の名前である言葉のリズムと手拍子のリズム、さらには名前を言う発話のリズムを自然と同期させることを目的としたあそびである（図2）。第1回目も同様のあそびを取り入れたことで、子どもたちから「前もやった」「知ってる」と反応があり、学生の名前リズム打ちの後に手を叩く様子が見られた。学生が遊び方を紹介した後、全員で円型に座った。子どもたちの中には自分たちの番になると「やりたくない」と活動に対して苦手意識を持っている子や「○○ちゃん！」と元気よく自分の名前を言って手でリズムを打って学生たちに表現をする子がいた。学生らは子どもたちの個々の反応に対して、拍手をしたり具体的に褒めたりと意識的にフィードバックを行っていた。

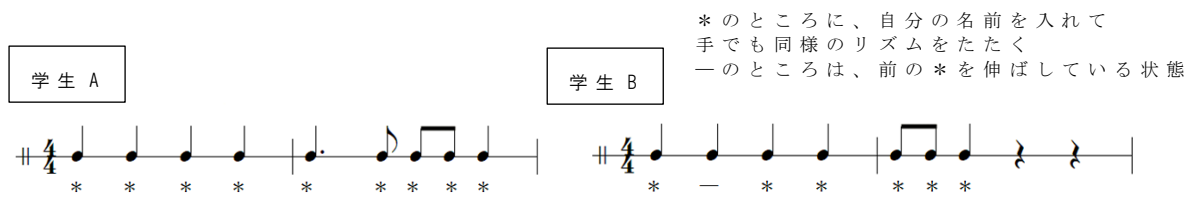


図 2. 学生たちが実施した名前のリズム

次に『ミッキーマウスマーチ』の音楽に合わせて、身体の動きを止めたり動物の表現をしながら動いたりする表現遊びを行った。この遊びでは、遊びをリードする学生 1 人が歌いながら全員が動いていたが、知っている音楽の旋律であったことから、子どもたちも旋律のフレーズが終わるところでは一緒に声を出したり、「ピタッ！」と言って身体を止めたりしていた。中には歌が終わったことを把握しながら、リード学生が見ていないところで動いたりするなど、音楽を意識して活動が進められているようであった。しかし、リード学生が「動物になって止まってみましょう」と声をかけると、何の動物になっていいか、または動物を身体で表現することに恥ずかしさを感じ戸惑っている様子の子どもたちも多かった。学生らは率先して動物の身体表現をしようとするが、学生自身も緊張と恥ずかしさからか小さな動きや単調な表現に留まっているようであった。

最後は『ドラえもん』（星野源）の音楽に合せて、リズムを意識したダンス表現活動が取り入れられた。学生らは子どもたちが覚えやすいよう同じ動きを繰り返すことや、動きに「右、左、前」と声をかけてわかりやすさを意識しているようであったが、自分たちが踊ることに必死になっている様子であった。さらに、音楽は携帯端末から流され、子どもたちの動く速さに合わせて音楽の速さを調整できないため、音楽と動きにズレが生じたり、音楽と動きの速さについていけなかったりする子も目立った。学生らは円形状になり子どもと顔を合わせて、動きの節目で褒めるような声かけを行ったり、リズムを刻む動きに合わせて声を出したりして子どもたちと関わっていた。（図 3 参照）

全体的に、活動の動きや流れを俯瞰的に見ようとする学生の動きや、チームとして連携して活動を成立させようとする学生の姿があり、第 1 回目の訪問時の子どもとの関わり方から成長を感じられた。しかし、活動時間は 20 分の予定であったが、全体がやや間延びしてしまったため 35 分と伸びてしまい、活動直後より学生らは反省だけではなく改善点を模索する話し合いが自然発生していた。



図 3. 第 2 回目ユニバーサル柔道アカデミーの活動の様子

4. 結果と分析

1) ビデオ記録による実践内容の分析と検討

第 2 回目の学生の実践内容を撮影したビデオ記録を元に、音楽科教育と特別支援教育の両者を踏まえた関わり方を抽出して述べる(表 2)。

まず、表 2 の冒頭部分は、対面式で学生らが名前のリズムを紹介している場面であり、子どもたちも一緒に真似をしてリズム打ちをしていた。その後、全員で円隊形になり一人ずつ名前のリズム遊びをするよう学生 A が促すが、A 男がリズム遊びに対して躊躇している様子が見られる(2' 57)。それに対して学生 A が戸惑いながらも、全体を円隊形になるように促しつつ、色々な方法を A 男に見せて活動に向かわせようとして関わろうとしている(3' 06)。そのそぶりを間近で見ていた A 女が、自発的に自分の名前にリズムを付けて学生 A に見せていた(表 2 の太字箇所)。ここでは、全体が円隊形になる段階であり、それぞれが名前リズムを紹介する場面ではないが、学生 A が具体的な動きを A 男に向けて提示をする中で、自然と A 女が学生 A に対して自然と表現して見せた場面であった。

表 2. 学生及び参加者の発言と活動の推移

経過時間	学生	学生（発言）	学生（活動）	生徒	児童（発言）	児童（活動）
2'31	D	はい！（手をあげる）				
		同じく島根県立大学から来ました				
		<リズムで学生が自己紹介>	名前は手を叩きながら			
	全員	<学生の自己紹介のリズムをまねる>	手を打っている		<学生の自己紹介のリズムをまねる>	学生と叩く。打つ姿勢をみながら
2'45	全員	おー！	拍手			A女。他の女の子が拍どあ
2'47	A	じゃあ今、せの次は、かしこくや、か己んま				
2'57				A男	これ無理なんだ	
2'58	A	できる できる	戸惑った返事			
	B	やってみよ やって				
		みよ！				
2'59	A	じゃあ みんなで円に				
		なう やってみまし				
3'03	A	じゃ 立ってください	子どもたちの方向にだんだんと歩いて寄る			
3'06	A	こうやって肩とて	A男に向かっ、立って肩を叩いて、いたりして	A男	おれ無理なんだよね	
3'18			A女やA男にお腹を叩く、おぶりを見せる	A女	Aちゃん（自分の名前をリズムを付けて言う）	学生Aの方にお腹を叩いてみせてる
3'21	B	おーじょうず！				
	A	おっ！				

この場面では、学生が全体を総括して活動を促しながらも、遊びを苦手として躊躇する子に具体的な示唆をしながら活動に向かわせようとする「特別教育的視点」と、この具体的な動きやリズムを提示することで、子どもたちの音楽づくり（小学校音楽科の表現の内容）や、音楽遊び（特別支援教育音楽科の表現の内容）と関連しながら子どもたちを活動へと導く「音楽科教育的視点」として捉えることができる。

ここでの特別教育的視点では「話し言葉」に加えて「体を使った視覚的な支援」「手拍子という音を使った支援」をすることにより複数の情報を提示していることが挙げられる。「音声」はその場限りで消えてしまうため、視覚的な支援や音などの複数の支援を組み合わせることで、活動内容を本人が確認しやすい工夫がされているといえる。

音楽科教育的視点としては、「音遊びを通して、音楽づくりの発想を得ること」（文部科学省：2018）と音楽科の音楽づくりに示されて

いるように、周りの友達あるいは先生と関わりながら、身の回りにある様々な音に親しむ中で遊びとして取り組み、自身で表現や発想を生み出すことが大事である。そうった発想を子どもたちができる、さらには子どもが自分の考えを表現としてあらわすことができるように、教員側は具体的な体験や提示をする必要もあるといえる。ここでの学生 A の動きは、A 男が活動することへの躊躇から参加を促そうとする具体的な提示ではあるが、それを他の児童が自分の表現へと生かすといった動きにつながったのではないだろうか。しかし、学生がこの A 女が表現した名前リズムを表現の面白さとして価値付けて、参加者全体で共有し、具体的に表現を認めていくことから名前リズム遊びが始まるとよかったのではないだろうか。

2) 実践に対する学生の振り返り

(1) KJ 法による分類と検討

学生が提出した各レポートを KJ 法により分析し、第 1 回目のレポートには 22 の文章があり「児童・生徒とのかかわり方 (8)」「児童・生徒の様子 (5)」「支援方法の気づき (2)」「他者からの学び (2)」「次回への意欲 (5)」の 5 つの要素に分類した。

第 2 回目のレポートには 32 の文章があり「活動の反省 (15)」「支援の気づき (9)」「他者からの学び (4)」「成功体験 (2)」「次への意欲 (2)」の 5 要素に分類ができた。

第 1 回目と第 2 回目に共通する要素は、「支援方法の気づき」「他者からの学び」「次への意欲」であった。第 1 回目だけの要素は「児童・生徒とのかかわり方」「児童・生徒の様子」であり、第 2 回目だけの要素は「活動の反省」「成功体験」であった。

第 1 回目に比べ第 2 回目は反省的な文面が目立ち、自分たちの取り組みに否定的な文章が多かった。これは、実際に自分たちが活動を進める中でイメージと現実のギャップに直面し反省した結果であろう。その中でも「成功体験」や「次への意欲」が見られたことは、学生の専門性向上につながる要素であると考えられる。

実践と省察を繰り返すことで、教師の実践力が身につくことを考えると、教科や特別支援教育の専門性の向上には寄与する取り組みであったといえることができる (表 3)。

表 3. 音楽とあそぼうの各回のレポートの構成要素と記入例
(○は肯定的、●は否定的な記述を表す)

回数	要素	記入例
第 1 回目	児童・生徒とのかかわり方 (8)	○とにかく明るく接することを念頭に活動した。 ○子どもたちの間に入ってコミュニケーションをとった。 ●思い描いていたように関われなかった。
	児童・生徒の様子 (5)	○太鼓をたたくのが上手な子どもがいた。 ○子どもに活動を教えてもらうことができた。
	支援方法の気づき (2)	○相手の振った話を膨らませる方が盛り上がった。 ○違和感のない程度にゆっくりと話したい。
	他者からの学び (2)	○先生たちが楽しそうなので、子どもも楽しそうだった。 ○先生たちは、普通ではほめないようなこともほめていた。
	次への意欲 (5)	○戸惑うことなく、話しかけていきたい。 ○子どもが参加したくなるような音楽遊びをしたい。
第 2 回目	活動の反省 (15)	●自分たちがもっと練習をして望めればよかった。 ●活動する内容が不足していた。 ●準備していた教材を使うことを忘れていた。
	支援方法の気づき (9)	●内容が少し難しかった。 ●ダンスのテンポが速かった。
	他者からの学び (4)	○指導をするタイミングを先生に教えてもらった。 ○友達が上手に子どもにかかわっているのを見習いたい。
	成功体験 (2)	○前回よりも積極的にかかわることができた。 ○全体を広く見ることができた。
	次への意欲 (2)	○これからに生かしていきたい。 ○これからもっとたくさんのことを学びたい。

(2) 観点別による分類と検討

また、学生の作成したレポートの各文章の記述内容を、筆者らで「実践に関する記述」「音楽教育に関する記述」「特別支援教育に関する記述」の観点別に分類した。複数の観点にまたがる内容の場合は重複して計算した。第 1 回目は総数 24 の観点に分類され、実践に関する記述数 17 (70.9%)、特別支援教育に関する記述数 5 (20.8%)、音楽教育に関する記述数 2 (8.3%) であった。第 2 回目のレポートでは総数 36 の観点に分類され、実践に関する記述数 26 (72.2%)、特別支援教育に関する記述 6 (16.7%)、音楽教育に関する記述数 4 (11.1%) であった。各レポートにおける各観点の結果を図 4 に示した。

両方に共通して、「実践に関する記述」が多く「音楽教育に関する記述」「特別支援教育に関する記述」が少なかった。学生の音楽教育や特別支援教育の知識や経験不足が一因であろう。今後教科や特別支援教育の観点に基づく記述が増加していくことが期待される。

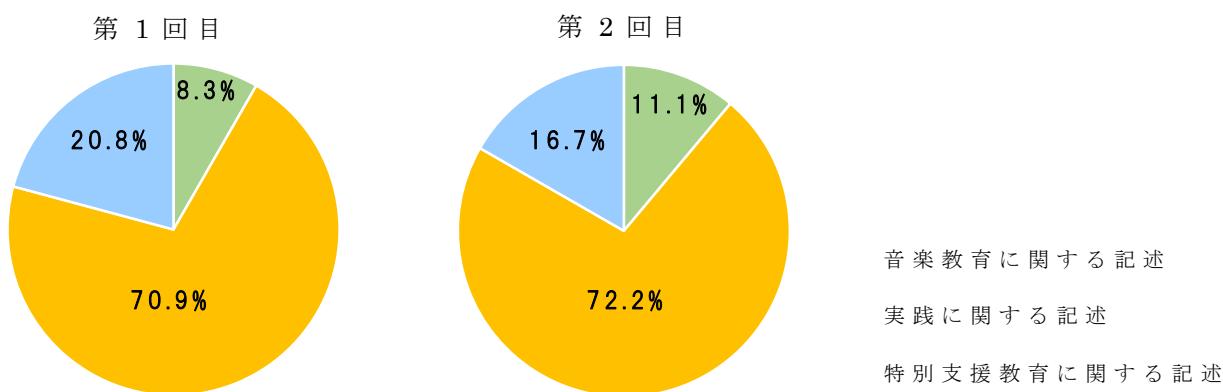


図 4. 各回のレポートにおける観点別の記述数の比較

5. 成果と課題

本論で取り上げた取り組みについて、ビデオ記録による時系列の変化、KJ 法によるレポートの分析、観点別に見た分類によって分析と検討を行った。

学生はまだ実践経験や知識等が不足していることは否めない。しかし、レポートの中には「音楽あそびにあまり参加しなかった●●くんは、タイコを叩くことがとても上手だった」(学生記述)といった、「音楽教育に関する記述」と「特別支援教育に関する記述」の両者を踏まえた視点を学生らが見出していることが明らかとなった。また、「その子にリズムを教える時に隣で手をたたくのを見せるのではなく、肩やひざをたたいた方がより分かりやすいと思った」(学生記述)と、1つの方法にとらわれて関わるのではなく、活動のねらいの中で児童一人ひとりに合った方法を見つけながら、関わろうとする教科と特別支援を兼ね備えた融合的な見方があるのも確認された。それらが、本研究の教科と特別支援教育の視点を併せた指導の在り方であり、今後より深めた研究を行うことで特別支援教育の専門性の向上につながる。

今回、学生の授業実践の取り組みについて音楽科教育と特別支援教育の観点から分析することで、新しく告示された特別支援学校学習指導要領が目指す教科の見方・考え方を教員養成校でどのように学生指導に反映していけばよいのかを模索することができた。課題としては、まず、学生の実践内容について音楽科教育と特別支援教育の観点の分析的視点の方法を確立させる必要がある。今回はビデオ録画による実践内容のリフレクションとレポートに見る分析を行ったが、分析的視点の項目の妥当性やより多くの実践内容データを用いて検討していくことが求められている。また、これらの分析をもとに学生らに指導

を行い、それが実践にどのように反映されていくのか、また実践対象者である児童の変化について検討していくなど、この取り組みを体系的に研究していくことが今後の課題である。

謝辞

本取り組みに際しては、ユニバーサル柔道アカデミー代表の宝正隆志先生、事務局の飯塚守先生をはじめ関係者の皆様に多大なお力添えをいただきました。また、島根県立大学一期生のみなさんには真摯に実践に取り組んでももらいました。最後に、一緒に音楽遊びに取り組んでくれた子どもたちに感謝申し上げます。

引用参考文献

- 文部科学省（2018）．特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編（幼稚部・小学部・中学部）（pp9）開隆堂出版
- 文部科学省（2018）．特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 各教科編（小学部・中学部）（pp140-172）開隆堂出版
- 文部科学省（2018）．小学校学習指導要領解説 音楽編（pp1-140）東洋館出版社
- 丹野哲也（2018）．特別支援学校新学習指導要領ポイント総整理 特別支援教育 全日本特別支援教育研究連盟（編）（pp6）東洋館出版社
- 古田雅明（2016）．KJ法の臨床応用－実践的な指針の探索 福島哲夫（編）臨床現場で役立つ質的研究法 臨床心理学の卒論・修論から投稿論文まで（pp21-34）新曜社